



写真 6年国語科「ようこそ、わたしたちの町へ」授業風景

題字 岡部昌樹氏

石川県教育工学研究会

2015.8.1

第89号

## 日々是学び也

石川県教育工学研究会 副会長  
金沢星稜大学 佐藤幸江

いきなり、大きな話題から。

世界人権宣言第19条：すべて人は、意見及び表現の自由を享有する権利を有する。この権利は、干渉を受けることなく自己の意見をもつ自由並びにあらゆる手段により、また、国境を越えると否とにかかわらず、情報及び思想を求め、受け、及び伝える自由を含む。

私たちの日常は、新しいメディアやコミュニケーション技術の進歩によって生み出された情報、暴力的な文化や宗教的対立を助長するようなメディアからのメッセージに囲まれている。しかし、上記のようなことを意識して生活をしてはいない。そこに、一種の怖さを感じる。

つい最近の出来事である。ある自治体のタブレット端末活用のお粗末さに関して、行政・教師・児童が口を揃えて訴えている記事を読んだ。ところが、その授業を参観していた人曰く「記事ほどのおお末さではなかった」そうである。記事を書いた記者にも発信の意図があり、話を

した人にも立場がある。溢れる情報を理解するスキルとクリティカルな態度で受け取るスキル、さらには日常生活に影響する問題の意思決定に加わり発信可能な手段を学ぶことが、高度情報通信社会を生きるために益々必要になってきている。さて、日本において、世界人権宣言に関わるような教育は、どこでなされているのであろうか。

石川県教育工学研究会では、これまでメディア教育や情報教育をある意味牽引してきたと自負している。メディアがこれまで以上に影響を持つようになれば、多様性や寛容性、透明性、平等、対話を認める社会の運営をめざして、メディア教育が益々重要性を増してくる。

学べる組織をもつことは幸せなことである。それぞれの地域での研究会の開催意義について共通認識をもち、今後も、メディア教育や情報教育に関する理論面実践面を互いに切磋琢磨のできる組織として成長していきたい。

# 白山支部活動計画

白山市立松陽小学校 正来 洋

## 1 月例学習会を開催

2015年度の白山支部、例年通りですが9名でのスタートです。振り返れば、1997年度の活動開始から数えて19年目となりました。20周年も間近ということに、月日の流れの速さを感じます。それでも細く長く活動が続いていることは、有難いことです。

メンバーも校内での立場や勤務地も大きく変わりました。しかし、いまだ学習を続けたいという気持ちには変わりはないようです。多忙も増し月例の学習会はなかなか定期的には開けなくなっていますが、細く長く交流と学習が続けたいと考えています。

## 2 情報教育・国語・図書館教育の接点

これまでの白山支部は、月例学習会で、実践報告や実践相談を持ち寄るスタイルでした。議論が夜遅くまで白熱し、その後の食事会やラーメンツアーと称した「二次会」での議論も真夜中近くまで盛り上がることもしばしばであったのが懐かしく思い出されます。

近年、国語科の中には「習得と活用」「単元を貫く言語活動」などのキーワードで、かつて情報教育で重要なポイントとして語られてきた内容がしっかりと取り込まれています。調べてまとめて伝える学習活動が、より地に足を付けた形で実践されることが期待されていることが感じられます。石川支部のメンバーの実践や話題も、実践報告もそれが中心となってきています。

またここ数年報告しているように、白山市で盛り上がっている「調べ学習コンクール」への関与が深まっています。図書館教育とのリンクはどのようなものが考えられるかを学習する機会が増えてきています。

「調べ学習コンクール」は、白山市の児童を対象に、夏休みに自分の調べたいテーマを決め、

図書館資料を使って調べてまとめるコンクールです。白山支部メンバーにはその審査委員が数名おり、児童の調べ学習のあり方、指導のポイントなどが議論しています。子どもたちが充実した調べ学習をするには、学校での日常の学習指導がしっかりしたものであることが欠かせません。国語科や総合的な学習の時間を中心に、情報をいかに収集し編集しアウトプットするか、意図的な指導を継続することはまさに情報教育そのものです。

今年度（2015年度）は白山市・野々市市において北信越地区の図書館教育大会が開催されます。メンバーにも事務局長や授業公開の会場校のスタッフも多く、十分に学習を深めていこうという機運が高まっています。



会場校（松陽小）での実践より

今後も引き続き、国語科・図書館教育と情報教育の接点をメンバーで追求して行きたいと考えています。

## おわりに

細く長く続く当支部の活動も、今年度は「北信越図書館大会」への関与という形でひとつの大きな山場を迎えます。これを新たな契機をしながら、支部活動として地道に学習会を続けていきたいと思えます。

## 金沢支部活動計画

茨城大学 小林 祐紀

今年度の金沢支部は、次のように大きく分けて3本の柱で活動する。1. 授業デザイン研究会（毎月実施：小規模）、2. 学習会（年4回実施：中規模）、3. 講演会および研究会（年

1回実施：大規模）会員相互の学習機会を創り出すとともに、日頃の実践研究の成果を発表したり共有したりする場、新たな会員を獲得する場として位置づけている。

| 事業   | 期日    | 概要  |
|--|-------|---|
| 第50回授業デザイン研究会                                      | 4月28日 | 趣旨説明・研究構想発表   |
| 第1回学習会   | 5月30日 | アクティブラーニングとメディア活用<br>「ホワイトボードの活用」<br>講師：佐藤幸江（金沢星稜大学教授）<br>模擬授業者：山口真希（金沢市立小坂小学校） |
| 第51回授業デザイン研究会                                      | 6月10日 | 研究構想発表・実践研究報告及び討議   |
| 第2回学習会   | 7月11日 | 「今、必要な学級づくり」<br>講師：八崎和美（七尾市立小丸山小校長）<br>実践発表及び討議                                 |
| 第52回授業デザイン研究会                                      | 7月14日 | 実践研究報告及び討議  |
| D-project 金沢 vol.8<br>～アクティブラーニングと<br>メディア活用を学問する～ | 8月8日  | 会長：中川一史（放送大学教授）による講演、<br>9名の実践発表、ワークショップ、パネルディスカッションなど                          |
| 第2回学習会   | 9月5日  | 「アクティブラーニングの最前線（授業実践編）」<br>ミニ講演、実践発表及び討議  |
| 第53回授業デザイン研究会                                      | 9月    | 実践研究報告及び討議  |
| 第54回授業デザイン研究会                                      | 10月   | 実践研究報告及び討議  |
| 第3回学習会（講演会）  | 11月7日 | 「岩瀬直樹氏から学ぶ子どものオーナーシップ<br>を大切にする学級づくり、授業づくり」                                     |
| 第55回授業デザイン研究会                                      | 11月   | 実践研究報告及び討議  |
| 第56回授業デザイン研究会                                      | 12月   | 実践研究報告及び討議  |
| 第57回授業デザイン研究会                                      | 1月    | 実践研究報告及び討議  |
| 第58回授業デザイン研究会                                      | 2月    | 実践研究報告及び討議  |
| 第4回学習会   | 2月6日  | 「アクティブラーニングの最前線（国際協働学習編）」ミニ講演、実践発表及び討議  |
| 県教育工学研究会研究発表会                                      | 3月6日  | 研究発表及び参加  |

## 第6学年国語科における児童の実態に応じた授業設計と評価 「名画の良さを伝える解説文を書こう」の実践から

茨城大学 小林 祐紀

### 1 はじめに

昨年度、採用されて2校目である金沢市立A小学校に赴任し6年生を担当した。担当する学級の学習に関する児童の実態として、2つの課題が挙げられた。1)学習意欲が低いこと、2)協働的な学習が成立しにくいことであった。

このような児童の実態を踏まえて授業を設計し評価することで、先に挙げた児童の課題が少しでも改善するのではないかと考えた。

### 2 目的

本研究の目的は、1)学習意欲が低いこと、2)協働的な学習が成立しにくいことというA小学校6年生B学級の児童の課題に有用な授業設計や教師の手立てを明らかにすることである。

### 3 研究方法

#### 3.1 授業の実施対象

A小学校6年生B学級を対象に授業を実施した。在籍児童は男子17名、女子13名である。研究対象とした授業は11月中旬～12月上旬に全9時間をかけて実施した。

授業は国語科で行うことにした。対象とした単元には、「ものの見方を広げよう「鳥獣戯画を読む」(読むこと：5時間)を採用した。筆者高畑勲氏の鳥獣戯画に対する着眼点や評価の言葉を参考にしながら、一人一人が名画の解説文を書くという単元を貫く言語活動を設定した。したがって、次の単元「読み取ったこと感じたことを表現しよう この絵、わたしはこう見る」(書くこと：4時間)を含めた複合単元を設定した。こうすることで毎時間、児童は必要感をもって授業に臨むことができると考えた。

#### 3.2 授業設計の方針

学習意欲や協働的な学習に関する場面が多く設定できるのは、「第6時・自分の見方を交流して、見方の幅を広げる。(タブレット端末の活用)」であると予想できた。

そこで第6時の授業を本時とする学習指導案を考えた。学習指導案を考える際には、次の2点を授業設計の方針とした。

①学習意欲が低く、仲間と関わる力弱い児童が、一人でも多く授業に参加できるようにするこ

と。(児童の実態から)

②単元を貫く言語活動(今回の場合は「解説文を書く」)を意識し、自分の解説文を書くもしくは考える活動を入れること。(児童の実態と国語科の授業づくりの特性から)

#### 3.3 本時の授業構成

本時の授業におけるねらいを以下のように2つ定めた。

・筆者の絵の着眼点と表現(評価の言葉)をもとにして、自分の言葉で絵を読み取り表現することができる。(読むこと)  
・考えを交流し着眼点や表現の同じ所、ちがう所に気づき、自分の解説文に活かそうとしている。(相互理解)

1つめは教科のねらいである。2つめは児童の実態の改善に対応するねらいである。

次に本時の流れを主な学習活動を中心に以下のように計画した。

1. 前時までの学習をふり返り、本時の学習課題を確認する。  
＜自分の言葉で違う場面を評価できるか＞
2. 筆者の着眼点を確認し、評価の言葉を2つに整理する。  
①絵から想像したり感じたりしたところ  
②絵のすばらしいところ
3. 1枚の絵から自分の言葉で評価する。  
・一人一人で絵を評価する。  
・班の仲間と考えを交流する。  
・学級全体で交流する。
4. 交流して得た学びを付箋紙に記述する。
5. 本時の学習をふり返りを行い、次時の学習を確認する。

#### 3.4 分析方針

分析方針の1つめは、課題に対して、場面ごとに児童の様子を記述することである。記述する際には、事実だけではなく、周囲の児童との関わりや教師の働きかけなどの授業の文脈も踏まえて、学習事象を解釈して記述していく。

2つめは、授業後に質問紙調査を実施し、課題に対して、児童自身がどのように感じていたのかを量的に把握することである。ただし、児童数が30名と少ないために統計的な処理は行わず、単純合計から得られた結果を示すと共に考えることを解釈し記述する。

## 4. 考 察

### 4.1 授業序盤の学習場面

授業序盤は、本時の学習活動1、2に該当する。本時では、授業の導入場面において、これまでの授業の成果について確認を行った。次いで、本時の位置づけを確認し、本時の学習の意味を「鳥獣戯画の異なる場面でもこれまでの学習が活かせるか自分の力を試みましょう。そして最終ゴールである名画の解説文を書くことにつなげていこう。」と確認した。

こうすることで、これまでの学習とのつながりが理解でき、学習意欲の高まりが期待できると考えたからである。

また、提示した2つの観点を明確に理解させるために、既習の筆者の評価の言葉（掲示物を活用）を用いて、児童とやりとりしながら、観点を区別していった。この時には、教師の問いかけに対して、全員が回答しようとする意欲的な姿が見られた。11つの評価の言葉に対してやりとりを繰り返すことで、2つの観pointsの違いについて、確実に理解できることを意図した。

さらには、これから行う学習活動に見通しが持てるように、電子黒板に提示した鳥獣戯画の異なる場面について、教師から着眼点と評価の言葉を2つ例示した。例示すると、「すぐにこれは観点①だ。」「この言葉は観点の②だ。」というたくさんつぶやきが聞こえた。ペアで観点を確認させた際にも、活発なやりとりを行っていた。

### 4.2 授業中盤の学習場面

授業の中盤は、本時の学習活動3に該当する。1人1台のタブレット端末に電子黒板に投影していたものと同じ鳥獣戯画の画像を送信し、一人一人が2つの観点を意識して、絵を評価する。

なかなか考えが書けずにいる児童や考えたことがあっていのかどうか不安になり、学習が進まない児童がいる。そこで、ワークシートに書いたら持ってこさせ丸をつけながら大いに褒めることにした。そうすることで、安心感と自信につながり、ワークシートをはみ出してまで書く姿が見られた。

さらに丸をもらった児童は黒板にも書くように指示した。この手立てによって考えが浮かばない児童も他の児童の真似をして考えを持つことができると考えた。結果、全員が2つ以上の考え（評価の言葉）を持つことができた。

次に、班の児童と考えを交流する場面では、多くの児童が自分の考えを伝えることができていた。しかし、聞いたことをメモするなどの指示がなかったために、すべてを聞き取れなかったり、覚えきれなかったりなどの様子が見られた。考えられる改善点としては、ノートにメモをする方法や次の学習活動4で使用される付箋紙

を渡しておき、書き込む方法が考えられる。

### 4.3 授業終盤の学習場面

授業の終盤は、本時の学習活動4、5に該当する。班の児童同士で考えを聴き合った後、「意見を交わして自分の解説文にも使いたいなと思った言葉を付箋紙に書いておこう」と呼びかけた。つまり、これが次への布石となり、解説文を書く際に役立つと考えた。

付箋紙に「まるで・・・のようだ」という評価の言葉を3つも残している児童がいた。後から聴いてみると、やはりこの言葉がとても印象的だったので、自分でも使っていきたいと思ったから書いておいたと話していた。また、中には、「あの蛙が刀を持っているというので持っているものにも目を向けるといいと思った。」というように着眼点の良さに気づいた児童もいた。

しかし、学習活動4に戸惑う児童も数名見られた。理由は、正確に他の児童の発言を覚えていないということや教師が先の発問の前に「聴き合ってみて学んだことを書きましょう。」と発問したためだと考えられた。本時では、具体的な事柄について学習を進めてきたにも関わらず、急に抽象的な事柄を記すように指示されたからだと推測できる。

### 4.4 意識調査の結果

授業終了後に情意面・認知面の簡単な質問紙調査を行った。調査は3つの項目（①やる気をもって取り組めたか②評価の言葉を考えることができたか③協働して授業に取り組むことができたか）について行い、4件法で行い単純集計（n=29）した。結果は以下のようになり、情意面・認知面共に高い評価値を示し、児童は授業を楽しむ、評価の言葉について学んだことが分かる。

| 項目 | ぜんぜん | あまり | まあまあ | とても | 平均値 |
|----|------|-----|------|-----|-----|
| ①  | 0    | 0   | 5    | 24  | 3.8 |
| ②  | 0    | 0   | 8    | 21  | 3.7 |
| ③  | 0    | 0   | 5    | 24  | 3.8 |

## 5. 結 論

いくつかの課題は残ったが、授業序盤の例示を多用した丁寧な指導や全員が考えを持つための手立て。その後、グループでの交流を行う展開。最後に、解説文に使えるような言葉を付箋紙に記す活動を取り入れた授業設計は、低い学習意欲と協働学習の成立の難しさという、2つの課題を抱える本学級の児童に有用であったと判断できる。

これらの事実は、決して本時の授業だけに關わるのではなく、他の授業場面でも応用できる要素を含んでいる。

最後に、児童の実態に基づき授業設計し、実践と評価を蓄積することは、教科の枠を超えた教師の力量の形成の一助となると考えられる。

# 小学校英語科学習に国際協働学習を位置づけた実践的研究

金沢市立米泉小学校 西野 聡子

## 1 英語科学習への児童の意識

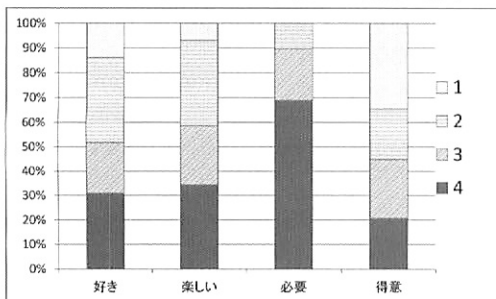
平成28年度に転任した勤務校で4年生30名を担当した。英語科学習の、「理解の向上より、意欲や表現への向上を重視する教科の特徴を活かし、英語の学習に意欲的に取組ませたいと考えた。生き生きと自分の思いを表現し、積極的にコミュニケーションを図る姿をめざしたいと考えた。

5月に英語学習に対する児童の意識調査を行い4件法で評価した。4は「とてもあてはまる」、3は「少しあてはまる」、2は「あまりあてはまらない」、1は「全くあてはまらない」とした。(表1) その結果、「英語が好きである」に対し、4や3のように、肯定的に答えた者は全体の5割程であり、他の質問項目に比べ、肯定的な意識が一番低くなった。また「英語が楽しい」「英語が得意である」の観点項目にしても、肯定的な意識を持つ者が、5割を少し超えた程度に留まった。理由項目によれば、「英語が難しいから楽しくない、好きではない」「うまく話せないし、自信がない」が大半となり、その他には「英語の授業がよくわからない」というものもあった。

表1 児童による英語の意識調査項目

|               |         |
|---------------|---------|
| 英語科の学習が好きである。 | 1・2・3・4 |
| 英語科の学習は楽しい。   | 1・2・3・4 |
| 英語科の学習は必要である。 | 1・2・3・4 |
| 英語科の学習が得意である。 | 1・2・3・4 |

表2 5月の児童による英語の意識調査結果



英語の学習への必要感を持っていても、日常に英語を使わないことや、話すことが中心の授業の形態から、苦手意識が固定しやすいことが見てとれた。

そこで、英語科学習に対し、意欲・関心を持って取組み、「もっと英語を学んで話したい」と自ら望むような、英語学習のカリキュラムを工夫したいと考えた。そのために、指導のカリキュラムに国際協働学習を位置づけ、英語を学ぶ相手と目的意識を持ち、学ぶ必要感を持って授業に参加するようにさせたいと考えた。

## 2 目的

英語科の学習カリキュラムに、国際交流学習活動を絡め、単元構成の工夫を行うことや、他教科と関連させた年間指導を行うことで、英語科の学習に対し、意欲的に学び、表現する力の育成をめざす。

## 3 研究の方法

英語科の学習カリキュラムに国際交流学習を絡め、英語の学習を意欲的に学び、表現する力を育成するために、主に2つの方法を行う。

1つ目は、児童同士が関わり合いやすい環境を作るために、児童一人一人が学級の中で必要な存在であることを認識し、自信を持って学習したり活動したりすることができるような雰囲気や温かな人間関係を築く。そのために、授業や休み時間、給食の時間など、学校生活において、自己存在感や自己有用感、共感の人間関係を築く手立てを計画的に行う。

2つ目は英語科と他教科との関連指導計画の作成し、台湾嘉義市のWenya小学校の5年2組の児童と国際交流活動を行い、英語を学ぶ目的を持たせる。「自分達の住む地域の伝統や文化を外国の同世代の友達に伝えたい」という願いを持たせ、伝える内容をよく理解してもらうために、言語以外に伝える手段として、絵を描く方法を用いる。「ジャパンアートマイルプロジェクト」(<http://www.artmile.jp/>)に参加し、

壁画を交流相手と半分ずつ作成し、最後に1枚の絵が完成するような手立てを行う。その活動を、自分達の学校生活や学習内容を「表現する」場とし、9月から3月までの間、取り組むこととする。

交流相手に伝える内容は、総合的な学習の時間に学ぶ、金沢の伝統工芸や文化や、金沢市の文化や産業などの発展に尽くした偉人などである。英語学習だけでなく、総合的な学習の時間や社会科、国語科においても関連させながら作成した指導計画に沿って学習を進めていく。

#### 4 研究結果

表3のように、児童同士が認め合いお互いが関わって活動できるような手立てを、年間を通して行った。AやBでは「話す・聞く」等の学習規律について基本的な週間を定着させ、CDEでは、協力し合う楽しさと1人1人がクラスにとって必要な存在だと感じる自己肯定感や有用感を持たせる意味で有効な手立てとなった。

表3 関わり合おうとする人間関係作り

|   |    |  |               |
|---|----|--|---------------|
| A | 4月 | 伝え合うルールを話し合い、「話す時」「聞く時」に必要な態度と心を確認する。  | 伝わる声と理解した反応   |
| B | 年間 | 毎朝の健康観察で一人一人が声を出して答える場を設ける。            | 英語で健康観察       |
| C | 年間 | 給食時間の準備と後片付けの行動を考えさせ、気持ちの良い過ごし方をめざす。   | 活動する双方の心の交流   |
| D | 年間 | 「今日のナイスさん」として、一人一人友達の良い所を認め合う場を設ける。    | 全校の取組         |
| E | 年間 | 係活動の常時と企画の活動をつくり、児童によるクラス運営の活性化を図る。    | 自主的に機能する関わり合い |
| F | 年間 | 「人のために何ができるかな」という学習テーマでクラスボランティアに取り組む。 | 全校の取組         |

表4 交流学習を取り入れた教科関連指導計画

|         | 5月          | 6月             | 7月                 | 9月                  | 10月                  | 11月                        | 12月         | 1月               | 2月                 | 3月          |
|---------|-------------|----------------|--------------------|---------------------|----------------------|----------------------------|-------------|------------------|--------------------|-------------|
| 英語      | Who's line? | What's on -5P- | Where do you live? | Do you play soccer? | A friend from Canada | What: subject do you like? | まとめ         | Where's Takashi? | What's she doing?  | まとめ         |
| 国語      | 自分達の話し合いの仕方 |                |                    |                     | フリップとボードで伝える         | 記事リーフレットを作る                | 長歌や俳句を読もう   | 手し心で読む           | こびぎのクを作ろう          |             |
| 社会学習    |             | 道徳観の視学         |                    | 八田勇一賞状の贈呈を知る        | 日本の伝統文化を学ぶ           | 関心をもちたい人物を知る               | わたしたちの関心を知る | 特色ある地域を知ろう       | 特色ある地域を知ろう         | 石川県の伝統工芸を知る |
| 交流学習    | 交流相手を知り合う   | TV会議で自己紹介      | TV会議で英語の練習         | 英語でメール              | 英語で手紙                | 英語でメール                     | 英語でメール      | 英語でメール           | 英語でメール             | 英語でメール      |
| 教材特性    |             |                |                    | 伝え合うルール設定           | 関心                   | 下書き                        | 特色・性上げ      | Where's Takashi? | Where's she doing? | まとめ・取組      |
| 児童学習の目標 | 話し合いの目標     | 英語学習の必要感       | 話し合いの必要感           | 学校生活に関心             | 台湾の伝統文化を知る           | 関心のある人物を知る                 | 関心のある人物を知る  | 関心のある人物を知る       | 関心のある人物を知る         | 関心のある人物を知る  |

また、小学校英語科カリキュラムから、国際交流学習を絡めて学習する単元を抜粋し、他教科の指導内容と関連させた指導計画案を作成し

た。(表4)

英語科の授業では、副読本や英語で話す児童同士のコミュニケーション活動を活動やゲームなどで理解するだけでなく、学ぶ意識に「交流相手の友達と話したい、相手の話も聞き取りたい」という思いを持たせ、そのための練習や実際にTV会議等で伝える練習や熱心に学ぶ姿が見られた。

また、総合的な学習の時間で学んだことを交流相手に伝えるために、表現方法を工夫しながらビデオレターを作成した。(図1)



図1 ビデオレター作り

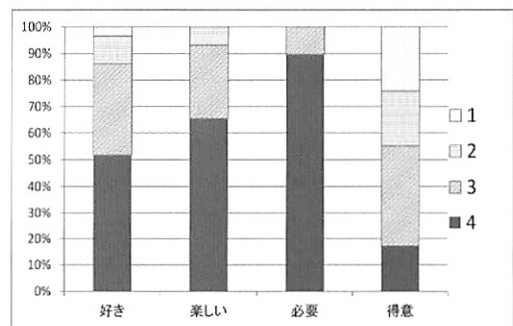
1枚の大きな壁画に、金沢の伝統文化や台湾と日本を繋ぐ八田



図2 壁画作成の彩色

勇一を大きな壁画として描き、(図2)英語だけでは十分に表現することができなかった思いや言葉を表現したりした。それらの協働的な学習活動を通して、児童1人1人の思いを出し合い、相手を認めながら協力して学び合う姿が自然な形で生まれた。

表5 2月の児童による英語の意識調査結果



2月に行った児童の意識調査でも、5月に比べ、全ての意識が上がり、英語学習に対する意欲的に学ぶ姿と表現する姿に繋がったことも、実践の成果として見られた。

## 英語活動におけるタブレットPCの活用

### ～アートマイル壁画プロジェクトの取り組みから～

内灘町立清湖小学校 飯田 淳 一

#### 1 はじめに

##### (1) アートマイル壁画プロジェクトについて

今回の相手校は、フランスのナンテール市エコールドバルザック校3年生22人。本校は4年1組児童25人での実践である。時差があるため、skypeを使ったテレビ会議は行わず、主な交流方法はJAMフォーラム（掲示板）で英語での書き込みによる交流と、ビデオを作成しYouTube上に置いて視聴してもらう交流とした。テーマや構図などは日本側から提案して、相手校が賛成する形となった。

なお12月末までに日本側の絵を描き上げて送った。（写真1）壁画の他に、フランスから児童の作品やニューイヤーカーを送ってもらったり、こちらからは作品と一緒にプレゼント（お菓子や小物）を送ったりした。



写真1 日本側で半分描き上げた作品

##### (2) ビデオ作成に関して

本校では5年前にタブレット型PC（東芝製CM-1）が導入され、4～6年生は一人1台の環境で使用できる環境にある。本体にWEBカメラとマイクがついているので録音・録画が手軽にできる。ソフトウェアはWindowsに付属のムービーメーカーである。

#### 2 目的と方法

英語での交流ビデオの作成において、発音練習と撮影にタブレットPCを使うことで、児童の英語活動に対して意識がどう変容するのかを、児童へのアンケートにより確かめる。

#### 3 実践の様子

交流のためのビデオ撮影は、一人一人の自己紹介、グループでの日本の紹介、それぞれが描いた絵の紹介の計3回行った。

その際、以下のように英語の発音のお手本ビデオを作成し、タブレットPCで再生させながら児童は練習と撮影をくり返し行った。

- ① 児童が伝えたいことをまず日本語で書く。
- ② その原稿をイングリッシュティーチャーが英訳し、ワークシートに書く。
- ③ その発音をイングリッシュティーチャーがタブレットPCを用いて一人一人の動画を作成する。
- ④ 児童がタブレットPCで視聴し発音練習をする。（写真2）
- ⑤ 練習した後、タブレットPCを用いて撮影を行う。
- ⑥ 自分の発音を聞き、くり返し録画して、よいものを選んで教師に伝える。

撮影した動画データはそれぞれのタブレットPCに保存されるため、それを共有サーバーに教師がコピーし、みんなで見られるようにした。また多少の加工をした後、YouTube上にアップロードして相手校に見てもらった。

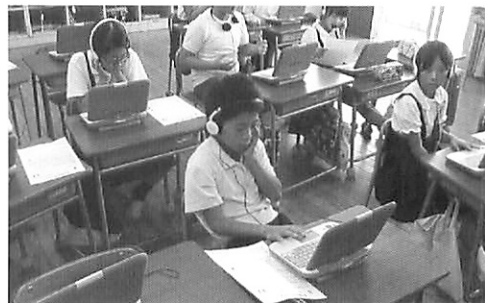


写真2 発音練習中の児童

##### (1) 自己紹介ビデオの作成

9月から交流の準備を始め、自己紹介は、自分の名前、好きなこと、家族のこと、アピールの4つとし、1学期の英語活動で学んだことから原稿を考えさせた。児童は興味津々で意欲的に取り組んだ。

##### (2) 日本の紹介ビデオの作成

10月後半から日本のことを紹介するビデオの作成にとりかかった。4人グループでの活動とし、合計6本のビデオを制作した。内容は、

- ① 内灘町の紹介
- ② 石川県の施設の紹介



- ③ 石川県の伝統工芸の紹介
- ④ 日本の食べ物の紹介
- ⑤ 日本の和菓子の紹介
- ⑥ 日本の遊びの紹介

とし、約2週間かけて行った。

英文の練習の時は、ビデオだけでなくイングリッシュティーチャーに聞き取りづらかったところを質問し、直接ゆっくりと教えてもらう時間もとった。

撮影にはだんだん慣れ、どのグループも協力してビデオ撮影を行うことができていた。また相手を意識してのあいさつや写真を見せながら説明するなど工夫している姿も見られた。

### (3) 壁画の絵の説明ビデオの作成

1月に入ってから、自分の描いた部分の説明ビデオの作成を行った。内容はあいさつ、描いた部分、少し詳しい説明、感想や相手への一言とした。

児童はお手本ビデオから聞こえた通りにカタカナでメモをしていたが、練習するにつれ、完全な日本語で発音になってしまっている児童が見られた。そこで、英文と照らし合わせながら、“s”や“t”などの子音を意識させた。その他にも、アクセント(強いところと弱いところ)、イントネーション(上がるところと下がるところ)、リズム(速いところと遅いところ)、間を空ける箇所(文の意味の境目)、なども確認させた。

## 4 考察

### (1) 練習について

イングリッシュティーチャーのお手本ビデオは、非常に効果的であった。「タブレットでの練習はわかりやすい」と答えた児童は21人(84%)である。児童もそのよさを体感したようだ。何度でも視聴することができ、分からないところがわかるようになることが自信にもつながると考えられる。

イングリッシュティーチャーは学年の児童数(51人)分を録画したが、短文であるのでさほど苦にならなかったようだ。それよりも児童の発音が思っていたよりもよい感じになったことに感心していた。

そこで、ネイティブ(アメリカ出身)のイングリッシュティーチャーに、3回目の児童のビデオ(20人分)を見てもらったところ、発音はたいへんよい(そのまま通じる)……11人  
よい(通じる)……3人  
まあまあよい(何とか通じる)……6人  
ほとんど通じない……0人  
であった。英語としてのレベルも上げることができると考えられるが、個々のレベルがどう上がっていったのかを次の機会に確かめてみたい。

今回練習させてみて、英文にカタカナでふりがなをつけてしまうと、ふりがな部分しか読まなくなり、子音の部分が聞こえているはずだけでも意識されず、発音がされないこともわかった。アルファベットに注目させ意識させることで、もっと丁寧に聞くことができるようになるのではないだろうか。

### (2) 撮影について

撮影に関して、「撮るのが楽しい」と感じている児童は22人(88%)と多い。自分の発音の直すべきところがわかり、そこを直して、自分の伸びも確認できることはやはりよさであろう。

「タブレットでの練習はやる気が出る」が18人と若干少ないのは、自分を撮るのはまだ照れくささが先に立つ児童が多いからだと思われる。

撮影時の児童の様子を見てみると、さほど抵抗感もないように見えるので、タブレットで自分を撮ることをさらに継続していくとどうなるかは次に確かめてみたい。

自由筆記欄に「みんなの撮ったものも見るができる」「みんなで撮ると楽しい」とあったが、他の児童といっしょによいところを認め合うよさがあると思われる。録画して残しておくことで何回も見て確かめられるのはデジタルならではのよさである。電黒のある教室で、出来上がったみんなのビデオを見てそれぞれのよさを確認したこともその理由の一つになるであろう。

### (3) 意欲面での向上

「英語がいやでなくなった」と答えた児童が22人で88%、「英語をもっと話せるようになりたい」と答えた児童が24人で96%と、英語の学習に意欲を持つようになったことが分かる。

これは、どのように英語で言えばよいかははっきりわかり、くり返し練習して、できたかどうかの伸びが自分でわかり、自分を肯定できるからと考えられる。「英語が楽しくなった」「タブレットでもっと英語の学習をしたい」が20人で80%である。今回タブレットPCを用いて、お手本のビデオと自分を撮影して自分自身を見ることを通して、意欲の面での向上が見られることがわかった。

## 5 結論と今後に向けて

普段の学習の場である教室で、児童それぞれに合ったお手本ビデオを個別に視聴して練習し、自分で撮影して自分の伸びを確かめるというタブレットPCの活用は、児童の意欲の面、発音のレベルアップの面で効果があることがわかった。

今後、個々のレベルアップにこの手法がどのくらいの効果があるのか、またその時の留意点について実践を通して調べてみたい。

# プレゼンテーション資料作成場面における 改善を促す授業デザインの考察

金沢市立小坂小学校 山口真希

## 1 はじめに

小学校国語科学習指導要領では、第5学年及び第6学年における「話すこと・聞くこと」の能力を育てるための言語活動例として、「資料を提示しながら説明や報告をしたり、それらを聞いて助言や提案をしたりする」ことが挙げられている。さらに「準備した説明や報告の発表原稿にふさわしく、相手の理解を深められるような資料を提示することを求め、適切な資料の選択や作成と、それらを活用した話し方が重要になる」と記されている。

本研究で実施した6年国語科「自分の考えを明確に伝えよう～平和について考える～」の単元においても、「話すこと・聞くこと」の能力を高めることをねらい、平和についての自分の考えを書いた意見文をもとに、相手の理解を得られるような資料を作成してプレゼンテーションするという言語活動を設定した。自分の主張をより明確に伝えるためには、提示する資料が発表する内容を補うものになっているか考えなければならない。しかし対象学級の実態を見るとこのような学習経験が少なく、資料の効果や構成について吟味する力が不足していると感じた。

そこで、自分の作成している資料が「本当に発表内容を補足しているか」「聞き手の理解を深めるものになっているか」改善を促すことができるような授業を設計したいと考えた。提示画面の視覚効果については、子ども自身でも比較的容易に改善が図れると考えるが、学習指導要領にある「話す内容と資料の整合」を考慮して、スライド全体の構成を見直すことは難しいと予想した。よって、画面構成の改善が図れるような指導の手立てをとって実践し、考察する。

## 2 研究の目的

本研究は、プレゼンテーション資料を作成する場面において、プレゼンテーション画面の構成を改善できるようにするために教師がとった手立ての有用性について検証する。

## 3 研究の方法

- (1) 対象児童  
金沢市立小坂小学校 第6学年3組31名
- (2) 手立て  
以下の2つの手立てをとった。

- ① 目的の違う2回の協働的な学習（コーナー活動・班活動）を取り入れる。
- ② スライド画面全体の構成について、見直しの視点が持てるような、モデルスライドを提示する。

## (3) 本時の学習過程

- 1 課題をつかむ  
＜聞き手に自分の考えを納得してもらえ  
るようなプレゼン資料を作成しよう＞
- 2 自分の計画に沿って活動する
- 3 モデルスライドを提示し、スライド画面  
を見直す視点を共有する
- 4 見直しの視点に沿って、画面を見直す
- 5 学習を振り返り、次の見直しを持つ

## 4 授業の実際

本時のねらいは「自分の主張を明確に伝えるために、相手の理解を深められるような資料を作成することができる」ことである。

### (1) 手立て①について

本時では協働的な学習の場を2回設定した。

1回目は授業の前半（学習過程2）で取り入れた。学習進度が同じ者同士が関わりあって活動できるよう、教室を4つのコーナーに分けた。

|                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| 原稿を作成する<br>(見直しも含む) | 素材を集める<br>(Wi-Fiコーナー) |
| スライド画面を作成する         | 発表練習をする               |

活動場所を分けたことで、課題が同じ友達に「助言を求める姿が多く見られた。そして、友達から受けた助言によって、一つ前の過程に戻って原稿を手直ししたり、写真や動画を再検討したりする児童も出てきた。

2回目は、学習過程3で画面構成の見直しの視点を得た子どもたちが、自分のスライド画面を改善する後半場面で取り入れた。どの子も学

習班のメンバーにスライド画面と発表原稿を見せて説明し、他の3人から助言をもらうことができていた。

## (2) 手立て②について

作成途中のスライド画面をチェックしていて、「いらぬスライドが入ってしまっている」「必要なスライドが入っていない」という児童が多く、画面だけ見ても何を伝えたいのかわかりにくいことに気づいた。紙芝居のように、スライド画面だけ見ても話の内容が分かるようにするため、2パターンモデルスライドを作って提示した。どちらのモデルスライドも、教科書の意見文をもとに作成した。

1つめは、不要なスライド画面をあえてたくさん入れたスライドを提示した。大げさに作ってあるので「余計なスライドが多い」「それほど大切ではないことに何枚もスライドを作っている」と反応があった。伝えたいテーマに対してそのページは「本当に必要か」再考することを押さえた。

2つめは、必要な画面が入っていないことに気づかせるため、2種類のモデルスライドを提示した(図表1)。図表1のスライドの3枚目があるもの(A)とないもの(B)を比較させた。

3枚目のスライドがないと、主張の根拠となる、コスタリカは非武装中立宣言をして軍隊を捨てた国であることが、画面だけではわかりにくい。この点に気づかせたかった。

## 5 考察

教師が意図した2つの手立てが有用であったか「児童のスライドの変容」「児童のふり返りの記述」「質問紙調査の結果」から考察する。

### (1) 児童のスライドの変容

この学習後、児童がスライド画面の見直しを行い完成させたものを見て、画面と画面のつな

がりを意識して改善していると十分判断できる児童は15人、意識して改善しているとおおむね判断できる児童が13人、改善に努力を要する児童が3人であった。手立て②のモデルスライドの提示は有用性があったと考える。

### (2) ふり返りの記述

本時の授業後のふり返り(自由記述)で、「班のメンバーから指摘や助言をもらって、改善につながった」ことを記述している児童が31人中29人であり、全体の94%であった。このことから、ほとんどの児童が友達から指摘や助言を得ていたことがわかる。などの記述が見られた。手立て①の協働学習の場の設定には有用性があったと考える。

### (3) 質問紙調査の結果

単元終了後の質問紙調査から関連する項目について整理する。

| 聞き手に納得してもらえそうなスライド画面を作成できたか |      |     |    |      |
|-----------------------------|------|-----|----|------|
| とても                         | まあまあ | あまり | 全然 | 肯定評価 |
| 18人                         | 10人  | 3人  | 0人 | 90%  |

肯定的に評価した児童の割合が90%であり高い数値となっている。

また「聞き手に納得してもらえそうなプレゼン画面にするために大切なことは何だとわかりましたか」の質問に対して自由回答を求めたところ、31人全員が回答した。その中でも、「不必要な画面や足りない画面がないか考える」と「スライド画面だけでも相手がわかるようにする」という、手立て②に関連する回答が12人から得られた。本時の学習前には、スライド画面の構成が適切かどうかという見直しの視点は児童の中にはなかった(活動の様子や毎時間のふり返りから)、本調査で手立て②に関する回答が得られたことは、本時の学習が有用であったと考えられる。

## 6 結論

本研究では、プレゼンテーション資料を作成する場面において、話す内容と資料が整合するように、スライド画面の構成を改善できることをねらって授業者がとった2つの手立ては、有用性があることがわかった。協働的な学習の結果どのようにスライド画面を改善したか児童に具体的に記録をさせておくと、学習の変容が見えるようになり、評価と指導につながる。今後改善していきたい。



図表1

## 2年生における8の字跳びの授業実践と改善提案

金沢市立中央小学校芳齋分校 荒木 弥生子

### 1 はじめに

8の字跳びとは、長なわの種目の1つで、縄を回している人の横から斜めに入り、一度跳んで反対側に抜けるというものである。これまで何度も入る場所、跳ぶ場所、抜ける場所を教えても、なかなか定着しなかった。うまい友だちの動きを見られても、自分がどのような動きをしているか理解していないため、実際の動きに反映されないのではないだろうかと思った。

そこで、子どもたちの動きをタブレット端末でフィードバックすることで、練習の仕方、技の上達に変容が見られるのではないかと考えた。

### 2 目的

8の字跳びにおける技能向上のためのタブレット端末の有用な活用方法を明らかにする。

### 3 研究の方法

#### (1) 授業の対象

金沢市立小坂小学校2年4組を対象に授業を実施した。(2014年当時)

#### (2) 単元計画

- 第1時 基本となる動きを押さえる
- 第2時 タブレット端末によるフィードバック
- 第3時 モデル視聴でコツを見つける
- 第4、5時 見つけたコツを意識して練習する(タブレット端末とワークシートの併用)
- 第6時 コツを全員ができそうな項目から並べ替える

### 4 授業の実践

#### (1) タブレット端末を用いたフィードバック

授業者がタブレット端末で記録し、よかったところや課題点を見せ、次の目標を決め、練習に取り組ませることを繰り返した。

#### 【成果】

自分の動きを客観的に見ることで、子どもた

ちのほとんどが、正しい動きを意識して練習することができるようになった。

#### 【課題】

指導者のみがタブレット端末を持っていると、児童のペースでフィードバックを行うことができないが、グループ毎にタブレット端末を持たせると、記録をしている児童と一緒に練習できなくなるという点が課題として挙げられる。

#### 【改善提案】

タブレット端末を固定し、定点カメラで記録することで改善を図ることができる。



#### (2) モデル視聴でコツを見つける

手本となる動画を見せ、コツとなるものを見つける活動を行った。

#### 【成果】

子どもたちは10個ほどのコツを、自分たちで見つけることができていた。

#### (3) タブレット端末とワークシートとの併用による練習

モデル視聴の際に見つけたコツの中から今日がんばるといふものに印をつけて、練習のめあてをもてるようにした。

#### 【成果】

コツを書いたワークシートを用いたことで、

自分たちが何をしなくてはならないかがはっきりとして、練習のよりどころとなっていた。

|                | できた | できた | できた |
|----------------|-----|-----|-----|
| 1 手をむねの前       |     | レ   |     |
| 2 声を出す。        |     |     |     |
| 3 足をじゃはらにしてとぶ。 |     | レ   |     |
| 4 頭を下げる。       |     |     | 〇   |
| 5 すきまがない。      |     |     |     |
| 6 れつがきれい。      |     |     |     |
| 7 回す人のよこ       |     |     | レ   |
| 8 すばやくバツテン。    |     |     |     |
| 9 なれをおじかくもつ。   |     |     |     |
| 10 回す人のむき      |     |     |     |
| 11 よそみをしがない    |     | レ   |     |
| 12 どんが後も走る。    |     |     |     |

### 【課題】

コツの中には直接見た方が評価しやすいものもあり、どれをタブレット端末で評価すればいいかなど、項目の性質に合わせた評価の仕方を吟味する必要があると感じた。

＜できるコツをふやしていこう!!＞

| 8の字とびのコツ iPad |  |
|---------------|--|
| コツの内よう        |  |
| 1 声「はい」「はい」   |  |
| 2 まん中でとぶ      |  |
| 3 手をむねの前      |  |
| 4 足をじゃはら      |  |
| 5 入り口から出口まで5秒 |  |
| 6 回す人のむき      |  |
| 7 れつがきれい      |  |
| 8 すきま         |  |
| 9 れつがとめる      |  |
| 10 あだもまじける    |  |

いっしょにできるコツをふやそう!!

セルに入っているものには必ず先生に見てもらおう

### 【改善提案】

- ① ワークシートに書くコツの項目をもっと厳選して、少なくする
- ② 評価の際にタブレット端末が必要なものとそうでないものをはっきりさせておく
- ③ 授業者がそれぞれのグループを回りながら、フィードバックをする際の動画の着眼点を持たせていく。

## 5 結論

子どもたちは実際の自分の動きを映像を通して

見ることで、自分のできていることやできていないことを理解し、修正することができると分かった。自分が意識したことを生かして、的確なアドバイスができるようになる児童が現れるようになったことから、動作を見る視点が以前よりはっきりしていると感じた。従って、タブレット端末を用いて自分の動作をフィードバックするという手だては有効であったと考える。

映像という具体的なツールを使ったことと見る視点がはっきりしたことで、子どもたちが主体的に修正しようという動きが見られた。これまで、その場で声をかけるという指導を何度も繰り返しても、一部の児童にしか修正が見られなかったことが、大半の児童が自分で考えたり、教え合ったりして修正することができていた。

前に述べたように、タブレット端末は扱いやすくすぐにフィードバックできるという点においては、その有用性を感じることができたが、児童に持たせたことで、児童の運動時間の確保が難しくなった点が課題と考えられる。この点については、定点に設置することで改善できたものの、タブレット端末を囲むのに適した人数なども考慮が必要である。

さらに、タブレット端末で評価することが適している動きとそうでないものがあり、タブレット端末を用いて何を評価するのかをもっと吟味していかなくてはいけない。

また、本来は3時間扱いの学習で、6時間を要している。このことは、タブレット端末、モデル視聴、ワークシートを用いることは効果がある反面、内容を精選しないと時間がかかるということと考えられる。

これらのことから、タブレット端末の活用は、学習の段階に応じて、

- ① 自分たちの動きのフィードバックから行動を修正する
- ② モデル視聴により、更に具体的な視点を持たせる
- ③ タブレット端末を使って考える項目とそうでない項目を吟味する
- ④ 項目を厳選した、ワークシートとの併用で自分たちの思考をより具体的に残すという明確な目的を持ち、活用していくと有用であると考えられる。

# 教育課程とカリキュラムマネジメントについての一考察

金沢星稜大学 村井 万寿夫

## 1 研究の目的

教育課程をカリキュラムマネジメントの観点から検討し評価するための要素を基に、独自にモデル化することによって留意点を呈示する。また、教科書分析を行いながら編纂意図を反映した教育課程編成の留意点について呈示する。

## 2 「カリキュラムマネジメント」

カリキュラムマネジメントの言葉について手元にある書籍を調べてみたところ、1974年にスタンフォード大学のE・W・アイズナーの『カリキュラム改革の争点』<sup>1)</sup>が木原健太郎・加藤幸次・高野尚好共訳によって我が国に紹介されている。ちなみに、1956年の岩波小辞典『教育』には「カリキュラム」の用語しか確認することはできない。

アイズナーの著書には1969年にアメリカ・スタンフォード大学においてカリキュラム会議が開かれたとあり、共訳者が「カリキュラムをめぐってのアメリカの教育界の動向を知るのに最も恰好な内容を持っている（巻末：解説より）」と述べていることから、アイズナーの著書が訳本として我が国に紹介され、カリキュラムの作成・実施・評価・改善、すなわちカリキュラムマネジメントの考え方を教育関係者が知るようになったと言っるとよいと思われる。

我が国独自の教育関係資料において「カリキュラムマネジメント」の言葉を確認することができるのは、2008年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」である。この答申を受けて同年8月には小学校・中学校の学習指導要領が告示され、小学校、中学校ともに、解説編「第3章 教育課程の編成及び実施 第1節 教育課程編成の一般方針 1 教育課程編成の原則（第1章第1の1）」において、次の記述が追加された。

「各学校においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、児童（生徒）の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童（生徒）の心身の発達の段階や特性等を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。」<sup>2)</sup>

この記述にある「教育課程を編成する」「目標を達成する教育を行う」は、カリキュラムマネジメントの観点から見れば「編成」と「実施」であり、目標の達成度を「評価」し、さらに目標を達成するための「改善」を行うこと、すなわち、中教審答申が示しているところのPDCAサイクルの関係で捉えることができる。

## 3 カリキュラムマネジメントのモデル化により見えてくること

カリキュラムマネジメントは「カリキュラムを主たる手段として、学校の課題を解決し、教育目標を達成していく営み」<sup>3)</sup>のことあり、現行の学習指導要領の重点である「基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくむこと」<sup>4)</sup>を実現していくものであると言える。

このように考えると、カリキュラム（教育課程）の編成は、学校の教育目標を踏まえた重点目標と全体計画と、各教科や領域における目標と年間指導計画、時間割、各単元の指導計画、週計画、本時の指導計画などによって行い、毎時間の指導の積み重ねによって教育目標を達成するといった取り組みが重要である。

これらのことを筆者なりの視点からモデル化すると下図のようになる（図1）。

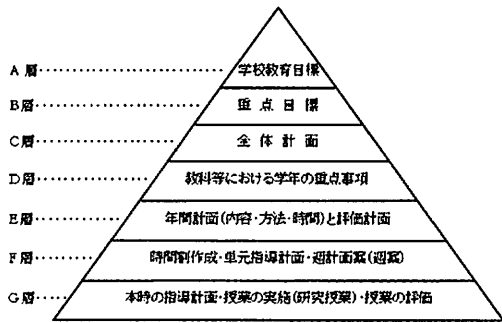


図1 カリキュラムマネジメントのためのモデル化とマネジメントの視点

#### 4 新教科書の使用開始に伴う留意点

小学校では平成27年度から、中学校では平成28年度から新教科書の使用開始となる。

現行において教科書は従前に比べて3割程度内容が増えた。もちろん、上述した学習指導要領を基にしたものであることから当然のことであるが、小学校においては国語、社会、算数、理科の4教科でみると24.5%、中学校においては国語、社会、数学、理科、英語の5教科でみると31.2%の増加率を示している。

よって、教え学ばせる内容が増えたのだが、「平成20年教科用図書検定調査審議会報告」(5)では、小学校と中学校の学習内容の円滑な接続への配慮・工夫として、「記述すべてを教えるのではなく、発展的な学習など個々の児童生徒の理解の程度に応じて学習する内容について、編集上の区分の徹底」を示している。

教科書を用いて指導する教師は、記述すべてを教えるのではないことを念頭に置き、児童生徒の理解に応じた使い方をすることが必要である。換言すれば、各自治体で採択されている教科書を俯瞰しながらその編纂意図を反映したカリキュラム編成を行う必要があると言える。

#### 5 教科書比較による学習指導の留意点

東京都教育委員会は、教科用図書検定調査審議会答申を受けて、各教科書会社の教科書について調査研究し、「教科書調査研究資料」としてWeb上で公開している。

例えば、「教科書調査研究資料(中学校)」(6)の数学においては、東京書籍(東書)、大日本図書(大日本)、学校図書(学図)、教育出版(教

出)、新興出版社啓林館(啓林館)、数研出版(数研)、日本文教出版(日文)の7社の教科書の「構成上の工夫」について分析しており、その内容を比較すると東書以外の6社の教科書において、「ふり返る」「ふりかえり」「〇〇を学習する前に」といったように、前学年や小学校での既習内容を振り返るための工夫を行っていることが分かる。教科用図書検定調査審議会答申にある「小学校と中学校の学習内容の円滑な接続への配慮・工夫」を具体化したものであると言える。

また、「教科書調査研究資料(小学校)」(7)の算数においては、東書、大日本、学図、教出、啓林館、日文の6社の教科書の「構成上の工夫」について分析しており、その内容を比較すると、次のことが分かる。

- ・5社(東書、大日本、教出、啓林館、日文)が、生活場面などによる身近な問題を設定したり実際の場面に生かしたりする工夫を行っている。
- ・4社(大日本、学図、啓林館、日文)が、自学や問題解決的な学習の工夫を行っている。
- ・3社(東書、学図、教出)が、個に応じた学習ができるような工夫を行っている。

以上、中学校の数学と小学校の算数を比べてみると、数学では「振り返り」が重視されており、算数では「身近な問題」「問題解決的学習」「個に応じた学習」が重視されているといった特徴がある。

よって、教師は各自治体で採択されている教科書の編纂意図を把握しながら、カリキュラムにおける指導の計画と重点を明確にして学習指導にあたる必要があると考える。

#### 6 結論

カリキュラムマネジメントモデルをもとに大局の見地から重点目標の達成度を評価しながら学校教育目標に近づいていこうとする営みと、教科書の編纂意図を把握しながらカリキュラムにおける指導の計画と重点を明確にして学習指導にあたることが重要である。

= 備考 =

紙幅の関係で『引用文献』掲載を省略した。

# アクティブラーニングとホワイトボード活用

金沢市立緑小学校 海道 朋美

## 1 はじめに

本年度第1回目の学習会が、5月30日に金沢星稜大学デザイン館において開催された。今回のテーマは「アクティブラーニングとホワイトボード」である。初めに佐藤幸江教授（金沢星稜大学）によるミニ講演を通して「アクティブラーニング」についての理論学習を行い、続いて山口眞希先生（小坂小）によるホワイトボードを活用した模擬授業を実施する。具体的な授業場面を通して、理論と実践を考える充実した学習会となった。

## 2 ホワイトボードを活用した模擬授業 ～5年社会「情報を上手に 活用するために～」

### ① 学習課題の共有

＜インターネットの光と影について考えよう＞

### ② インターネットの便利さと問題点を考える

- ・個人でワークシートに書き出す
- ↓
- ・グループでホワイトボードに整理する
- ↓
- ・他のグループのホワイトボードを見て回り、自分のグループにはない考えを見つける

### ③ インターネットで情報を選択する時や発信する時に気をつけることについて交流する

（情報活用3か条作りとしてまとめる工夫も）

- ・個人で付箋に書き出す
- ↓
- ・グループで交流する  
似たものは付箋を重ねて分類する
- ↓
- ・全体発表

### ④ 学習のまとめ

## 3 模擬授業を通して

一人一人が主体的に思考し仲間との対話を通して学びを広めたり深めたりすることを大切にしたい。そのために、まず個人で考えをつくる時間を保障し、学習終末は個人で学びを整理する。そしてその過程でグループや全体での交流により学びを広め深める手だてをとる。ここでのホワイトボードや付箋などの活用は思考を可視化するツールとして互いの考えの理解・吟味・創造を支えるものとなる。学びの保障においては、それぞれの考えの拡散と収束を十分に考慮した授業づくりが必要となる。収束場面において、教師は何を取り上げ、どのように学びを深めるのか。実践課題が明らかとなった。

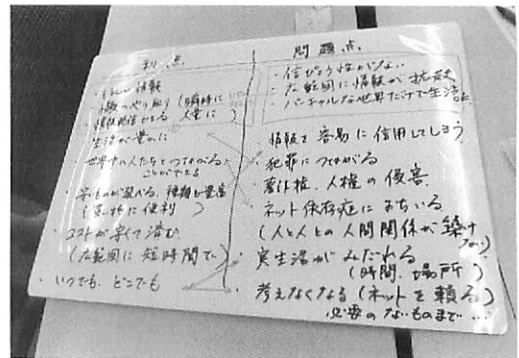


図1 グループで意見を出し合う



図2 全体交流場面



## アクティブラーニングを支える学級づくり

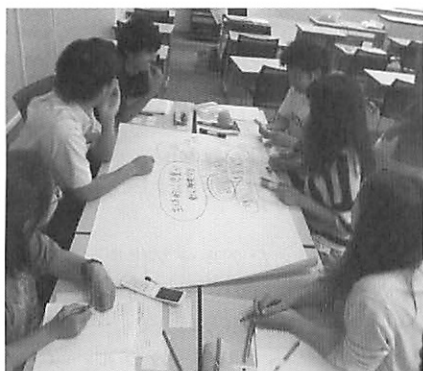
中能登町立鹿島小学校 布川 かほる

### 1 はじめに

7月11日(土)金沢星稷大学において、アクティブラーニングが成立するために「今、必要な学級づくり」をテーマに第2回学習会を行った。15人の新規参加者を含んだ28人で考え、話し合った学習会の様子を報告する。

### 2 児童が主体的に動く学習とは

研究部の福田晃先生(金沢市立十一屋小学校)からのアクティブラーニングについての説明を受けた後、4つのグループに分かれて「児童が主体的に動く学習」について、それぞれの考えを出し合った。



全体でのシェアリングでは、「追究したくなる課題」「グループ学習」「個とグループ」「対話」「教師のコーディネート」といったキーワードが各グループから発表され、「主体的に動く」ことを仕組むために、必要な視点が広がっていった。また、グループ活動での児童の姿を「名人」「達人」と価値づけしながら、めざす姿を児童と共有化している福田先生の実践報告からも、教師の参加者の今学期を振り返り、次につながる視点となった。

### 3 なぜ今アクティブラーニングなのか

八崎和美先生(七尾市立小丸山小学校校長)のミニ講演では、21世紀に求められる力について、まずお話をいただいた。アクティブラーニ

ングという言葉が関心を集める前から、児童が議論を繰り返しゴールに向かっていくすばらしい実践をされている八崎先生のご講演である。特に心に残ったのは、これからめざすのは「レゴ型」の学習だということである。ゴールの枠が決まっていて、個々のパーツとして組み合わせさせていく「パズル型」から、各々の形も違い、出来上がるものも違う「レゴ型」が21世紀に求められているそうである。その力をつけるためのアクティブラーニングであり、アクティブラーニングを支える「話す・聞く・書く」といった土台となる力を鍛えることが、1学期のこの時期には重要となる。「聞く・話す」力を鍛える1例として教えていただいた「知のネットワーク・始めの一步」は、2学期からでも実践していきたいものであった。

#### (1) 知のネットワーク・はじめの一步①

- ・最初の人にはわざと外れたことを言う
- ・人から出る意見は否定しない
- ・意見はすべてはめる・賞賛する

⇒アクティブラーニングを成立させようとする  
とすてきな学級経営ができる

#### (2) 知のネットワーク・はじめの一步②

- ・自分の意見を言う
- ・他に感想・意見・質問を言う
- ・グループで出た意見を報告する

↓

- ・グループの意見を同じ意見・違う意見に分ける

↓

- ・分けられた意見に賛成・反対を言う  
関連付けて意見を言う

⇒同じパターンを繰り返し続けていくことで、自分達で関連付けながら話し合いができるようになる

アクティブラーニングのための学級経営という一方的なものでなく、アクティブラーニングをめざすことでコミュニケーション能力が高まり、学級経営もうまくいく。1学期だけではなく、1年を見通して育んでいく必要がある。

# アクティブラーニングとアートマイル国際協働学習

金沢星稜大学 清水和久

## 1 はじめに

アートマイルは外国の同世代の子供たちとネット上で話し合いながら、合意したテーマで国際協働学習をおこない、最終的に可視化できる壁画を共同で完成させるプロジェクトである。今年度はパリのユネスコ本部から、日本の国内の学校に対してこのプロジェクトへの参加要請があり、特別枠で13校がこれに応募した。石川県からの参加は毎年20クラス余りでこれは日本全国の参加数の1/3の数にあたる。今年度は北陸地区の大学で構成するESD支援組織である「北陸ESDコンソーシアム」(金沢大学の鈴木教授が事務局長)の1つの事業としてアートマイルの支援が決定している。

また、プロジェクトはユネスコが推進する「持続可能な開発のための教育」(ESD)に合致している。ESDといえば環境教育がメインになりがちであるが、戦争こそは環境破壊の最たるものである。よって究極のESDは世界平和を作ることでありとらえる。互いの文化を理解し、尊重する気持ちを持つためには共通の目的をもって協働する体験が必要である。力を合わせて協働作業を行う中で達成感を味わうことで互いのすばらしさを実感できる。このプロジェクトにはその要素が散りばめられている。

## 2 アクティブラーニングの要素

アートマイルプロジェクトにはそれ自身でアクティブラーニングの様子が含まれている。

- ・自分たちの思いをいかに相手に伝えるか、また相手の思いをいかに汲み取るかが重要
- ・教師にとっては、外国と交渉しながら壁画を完成させること自体ハードルが高く、児童生徒にとっても先生に任せきりではどうなるかわからないという危機意識を持つことになり全員の協力体制が必要だと感じられる。
- ・絵のデザインは合意しないと描けないので、相手に自分たちの思いを伝える必然性がある。

・ネットの向こうにはリアルタイムで学習を進める相手が存在し、ダイナミックに関わり合いながら学習が進んでいく事実がある。

## 3 アクティブラーニング化の手立て

プロジェクトにその要素があっても実施する教師のやり方で生かせるかどうかが変わる。悪いパターンからの対策を述べてみたい。

### 1) 児童の変容をみとる場面をつくる

×教師の見通しがなく、多忙の中で交流のスケジュールをこなしているだけ。児童は交流をやらされているだけになる。→○どこで児童の変容を迫るのか、評価の観点を持った上でメリハリをつける。

### 2) 相手国への積極的アプローチ

×相手への働きかけを1度しかせず返事が来るまで動き出さない。→○相手から返事がなくても、相手をけなすのではなく、なるべくいい方に解釈し日本がお手本を示す形で、アプローチを継続する。

### 3) クラスを超えたグループ化を

×自分のクラスだけの活動で動き、相手の学校の児童のことに考えが及ばない。→○両国にまたがった同じテーマのワークグループを作り、つながりを意識した活動をしくむ。

## 4 まとめ

アートマイルは、外国の実在する相手と協働作業をするリアルなプロジェクトである。ゴールまでには様々な障害がある。しかし、教師がそれを教材としてとらえ、児童と一緒に解決していくところに、児童が本気で取り組むアクティブラーニングになると考える。

2015年度も石川県から20あまりのクラスが参加し、月1回の国際協働学習研究会で方向性を検討している。今年度はぜひアクティブラーニングの視点で取り組み、成果は2月6日の教育工学の学習会で報告する。

アートマイル URL <http://www.artmile.jp/>

## 石川県内の学力（→授業実践力）向上への取り組み

金沢大学 加藤 隆 弘

### 1 石川県内の取組、第二ステージへ

石川県では、全国学力・学習状況調査の開始から三年間（H19～21年度）の結果や、県基礎学力調査等の分析を踏まえ、そこで明らかになった課題に取り組むため「いしかわ学びの指針12か条（H22年度）」を核とした「学力向上プログラム」を策定・実施した。その実践の核となる「12か条推進校指定事業（H24年から3カ年）」、「課題発見力育成事業（H25年から2カ年）」がいずれも昨年度最終年を迎え、指定研究に取り組んだ各校が様々な成果と課題を明らかにし、次へ繋ぐまとめと提案を行った。

この成果と課題を踏まえ、今年度からは、各々の優れた取組や課題を効果的に共有し、協働して問題解決・発展させることを目指す「学びの組織的実践推進事業」（拠点校、小：11校、中：9校、連携校とあわせて計65校）、これまでの特色ある取組・学校研究の素地を活かし、これからの学び／指導評価の在り方（いわゆるアクティブ・ラーニングなど）を実践的に開発する「能動的学習推進事業」（小：5校、中：6校）がそれぞれスタートした。併せて、この間の取組、情勢の変化を踏まえ、「学びの指針」の改定作業を進めており、こちらについては10月の県学力向上フォーラムで示す予定となっている。

金沢市でも「授業改善10のポイント」の改訂作業が始まるなど、急ピッチで進む次期学習指導要領策定の動向や、この間の取り組みから明らかとなった地域それぞれの特性や課題などを踏まえ、これから目指す学びの姿を改めて見定め、共有しようとする取組が各地で進んでいる。

### 2 全国学調にみる、全県の傾向と課題の概要

石川県全体の傾向としては、基本的な教科の知識技能、読み書きは良好であると言える。「書く」ことについて、「考えの理由がわかるように気をつけて書く」「わけや求め方を書く（説明する）問題について、最後まで回答を書こう

と努力する」などで、小中学生共に意識向上の着実な伸びが見られ、そのことが回答傾向にも現れている。「話す・聞く」については、「自分の考えを発表する機会が与えられている」「学級の友達との間で話し合う活動をよく行っている」等の項目で、小学校で9割近く、中学校で8割近くまで伸び、当初課題への取組の成果が現れ始めている。一方で、複数の資料・情報から根拠を取り出し、自ら筋道を立て、自分の言葉で説明したり解決したりすること（1条、2条関連）には依然として課題がある。また、国語を好きだと回答する児童・生徒の割合が、引き続き全国平均を下回る状況にあり、わかる楽しさ、使える喜びを実生活の場面などを通して実感できるように、取り組みたい。児童・生徒が自ら問題・課題意識を持って取り組む学習活動の中で、書くこと、読むこと、話すこと、聞くことそれぞれをより高次の段階へ進めて実践的に各自の思考スキルを育み、全員参加の学び合いを通して実感ある解決につなげるプロセスを着実に学習の中に埋め込み、繰り返し実践する必要がある。

※全国学調の分析については、平成26年10月発行の結果の概要にまとめられている。また、学力向上フォーラムなどで具体的に紹介する。

### 3 どのように学び、何ができるようになるか

いま取り組みつつある学びでは、これからの社会に関わる皆で実態（都合の良いこと悪いこと全て）をとらえた上で、様々な立場からアイデアを出し合い、判断・決断し、互いにその意義や意味に納得・理解して力を出し合い運営していく、そのための力と経験の基盤となるものを鍛えようとしている。これまで取り組んできたこと、と油断することなく、学びのプロセスがより活性化するための教材研究と学習課題の質的向上、小中を貫いて積み上げる「わかる」「できる」の実感の連鎖など、あたりまえのレベルを底上げすることに引き続き取り組みたい。

# 一人一台のタブレット端末環境で行った パンフレットづくり実践

金沢市立十一屋小学校 福田 晃

## 1 はじめに

6年国語科「ようこそ、わたしたちの町へ」の単元において、一人一台のタブレット端末を活用したパンフレットづくりの実践を行った。本単元でタブレット端末を活用した場面及びアプリは、調査の際に活用したカメラアプリと、入力する際に活用したスズキ教育ソフトE-REPORTである。

なお、本単元では、金沢市観光課の職員をゲストティーチャーとして招き、パンフレットを作ってほしいとの依頼を受けるというところから学習をスタートさせた。北陸新幹線に乗ってきた観光客（相手意識）が、手に取ったときに～に行ってみたいと思うようなパンフレットを作る（目的意識）ことを単元のゴールと設定した。一人が一つのテーマを設定し、クラスで一冊のパンフレットの完成させることとした。なお、本単元は、全12時間であり、入力などは課外で行った。

## 2 実践の概要

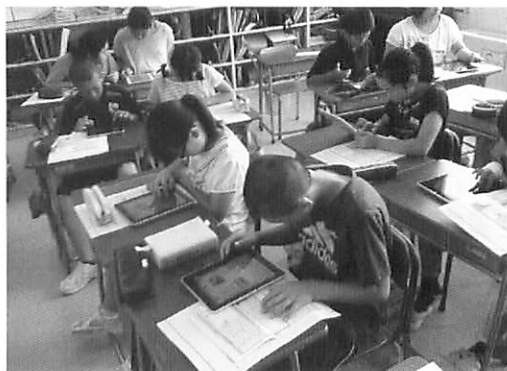
単元の流れを以下に示す。なお、本稿では活用した2つの場面を取り上げ、述べていくこととする。

|    | 単元の流れ  |
|----|--|
| 一次 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の見通しをもつ。</li> <li>・学習計画をたてる。</li> </ul>  |
| 二次 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・調査の視点を持つ。</li> <li>・現地調査に行く。</li> <li>（☆カメラ機能を使う。）</li> <li>・自身のページのテーマを決める。</li> <li>（☆撮影した写真を見る。）</li> <li>・文章を書く。</li> <li>・タブレット端末で入力する。</li> <li>（☆E-reportで入力する。）</li> <li>・推敲する。</li> <li>（☆E-reportで修正を行う。）</li> </ul> |
| 三次 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちで評価し合う。</li> <li>・観光交流課の方から助言をもらう。</li> </ul>  |

## 3 活用場面

### (1) 調査内容の想起

児童らは調査に行き、自らの手で多くの写真を撮影してきた。自身のパンフレットで取り上げる事柄を整理する際に、撮影してきた写真を見ていた。場面想起が可能であることから、どの児童も取り上げる事柄を整理し、テーマを決め、下書きを書くことができていた。



### (2) パンフレットの修正

手書きのパンフレットとは異なり、何度も修正を行うことができる。一度作って満足するのではなく、何度も見直し、よりよいパンフレットになるよう見直していた。



写真2：パンフレットの修正を行う児童

※詳細については、2015年8月8日(土)に行われるD-project 金沢大会2015で発表する。

考えていること、伝えたいことがあるみなさん



今なら使えるツールがあります。

つくろう！ニホンの教育フューチャー！

D-project 2015 in 金沢

テーマ アクティブラーニングとメディア活用を学問する

❖ 内容

(午前) ・キーンノートスピーチ

・実践発表1

〜 企業PRタイム 〜

・実践発表2

(午後) ・ワークショップ

・どっぶりアナログ授業改善ワークショップ

・アクティブラーニングの模擬授業1 (タブレット端末の活用)

・アクティブラーニングの模擬授業2 (ホワイトボードの活用)

〜 企業ブース周遊タイム 〜

・パネルディスカッション

2015年8月8日(土) 9:50 ~ 16:30  
(受付9:15~)

❖ 会場 金沢商工会議所 金沢市尾山町9番13号 TEL.076-263-1151

主催：D-project 金沢実行委員会 共催：一般社団法人デジタル表現研究会, 石川県教育工学研究会

後援：石川県小中学校視覚聴覚教育研究協議会

協力：スズキ教育ソフト

当日、受付にて資料代500円をいただきます。

参加申し込み・詳細は <http://kokucheese.com/event/index/309485/>



上原海蔵 (左列上から) コーギン/カンパセーション、木ノ下伊藤博文写真/ダヴィッド、アレクスの窓 (右列上から) カラダアジサイ/聖ペテロの右腕、日清戦争前線より、シューベルト/アーサー、いづれもマリア/クラウディン

# 石川県教育工学研究会 会計報告

平成26年度 決 算

## 収入の部

| 科 目       | 予 算     | 決 算     | 備 考         |
|-----------|---------|---------|-------------|
| 会 員 負 担 金 | 388,000 | 388,000 | 会費4000円×97人 |
| 県 補 助 金   | 400,000 | 400,000 |             |
| 賛 助 会 費   | 80,000  | 60,000  |             |
| 雑 入       | 120     | 120     | 銀行利子など      |
| 合 計       | 868,120 | 848,120 |             |

## 支出の部

| 科 目     | 予 算         | 決 算     | 備 考     |                   |
|---------|-------------|---------|---------|-------------------|
| 補助対象経費  | 謝 金         | 130,000 | 180,000 | 講演会謝金             |
|         | 旅 費         | 150,000 | 40,000  | 全国大会・富山大会         |
|         | 消 耗 品 費     | 25,000  | 25,000  | コピー代、封筒、タックシール    |
|         | 印 刷 費       | 300,000 | 300,000 | 会報、研究紀要           |
|         | 函 書 費       | 100,000 | 140,000 | 学習グループ研究奨励費       |
|         | 事 務 連 絡 費   | 0       | 0       |                   |
|         | 通 信 運 搬 費   | 95,000  | 95,000  | 会報・研究紀要郵送、往復はがき   |
| 借 上 料   | 0           | 0       |         |                   |
| 計       | 800,000     | 780,000 |         |                   |
| 補助対象外経費 | 賃 金         | 40,000  | 40,000  | 事務局事務員            |
|         | 組 織 加 盟 金   | 15,120  | 15,120  | 日本教育工学研究会会費、送金手数料 |
|         | 諸 会 合 費     | 7,000   | 7,000   | 諸会合費(大会昼食費)       |
|         | W E B 維 持 費 | 6,000   | 6,000   |                   |
| 計       | 68,120      | 68,120  |         |                   |
| 合 計     | 868,120     | 848,120 |         |                   |

|         |         |       |
|---------|---------|-------|
| 本年度収入合計 | 本年度支出合計 | 次年度繰越 |
| 848,120 | 848,120 | 0     |

平成27年度 予 算

## 収入の部

| 科 目           | 予 算     | 備 考         |
|---------------|---------|-------------|
| 会 員 負 担 金     | 328,000 | 会費4000円×82人 |
| 県 補 助 金       | 320,000 |             |
| 学 生 会 員 負 担 金 | 44,000  |             |
| 雑 入           | 130     |             |
| 合 計           | 692,130 |             |

## 支出の部

| 科 目     | 予 算         | 備 考     |                   |
|---------|-------------|---------|-------------------|
| 補助対象経費  | 謝 金         | 80,000  | 講演会謝金             |
|         | 旅 費         | 110,000 | 全国大会・富山大会         |
|         | 消 耗 品 費     | 6,000   | コピー代、封筒、タックシール    |
|         | 印 刷 費       | 300,000 | 会報、研究紀要           |
|         | 函 書 費       | 60,000  | 学習グループ研究奨励費       |
|         | 事 務 連 絡 費   | 0       |                   |
|         | 通 信 運 搬 費   | 84,000  | 会報・研究紀要郵送、往復はがき   |
| 借 上 料   | 0           |         |                   |
| 計       | 640,000     |         |                   |
| 補助対象外経費 | 賃 金         | 30,000  | 事務局事務員            |
|         | 組 織 加 盟 金   | 10,130  | 日本教育工学研究会会費、送金手数料 |
|         | 諸 会 合 費     | 6,000   | 諸会合費              |
|         | W E B 維 持 費 | 6,000   |                   |
| 計       | 52,130      |         |                   |
| 合 計     | 692,130     |         |                   |

# 平成27年度 石川県教育工学研究会役員名簿

(順不同 敬称略)

【会 長】 村井万寿夫 (金沢星稜大)

【副 会 長】 加藤 隆弘 (金沢大) 清水 和久 (金沢星稜大)  
佐藤 幸江 (金沢星稜大) 細川都司恵 (安原小)

【常 任 理 事】 葛蒲田英夫 (新神田小) 中條 敏江 (蕪城小) 山本 洋 (高松小)  
八崎 和美 (小丸山小) 荒巻 雅博 (中島小) 山下 雅美 (外日角小)  
渡辺 直人 (東明小)

【理 事】 中野 淳子 (富陽小) 西田 素子 (西南部小)  
荒巻 幸子 (中能登教育事務所) 山下 匡 (大屋小)

【運 営 委 員】 〔〇は研究部〕

角納 裕信 (木曳野小) 〇山口 眞希 (小坂小) 〇荒木弥生子 (中央小芳斉分校)  
〇西野 聡子 (米泉小) 〇福田 晃 (十一屋小) 金岡 弘宣 (緑小)  
青江 弘義 (大根布小) 松本 豊 (高浜小) 〇布川かほる (鹿島小)  
板岡 有子 (邑知中) 田口 優 (小丸山小) 谷口 真也 (小丸山小)

【事 務 局 長】 飯田 淳一 (清湖小)

【事務局次長】 〇福田 晃 (企画・WEB担当：十一屋小)  
〇山口 眞希 (組織拡大担当：小坂小)  
〇海道 朋美 (会報担当：緑小)

【研究部長】 〇小林 祐紀 (茨城大学)

【研究副部長】 〇山口 眞希 (小坂小) 〇福田 晃 (十一屋小)

【会 計】 清水 和久 (金沢星稜大学) 山口 眞希 (小坂小)

【会 計 監 査】 西野 聡子 (米泉小) 西田 素子 (西南部小)

【日本教育工学協会役員】 (研究会理事) 村井万寿夫 (名誉理事) 吉田 貞介

【名 誉 会 員】 西出 隆 紙谷 威 山本 昌猷 清丸 亮一 谷内 敏夫  
藤井 昭久 押野 市男 南 千之 内田 正明 三田村英明  
西田 政人 宇都宮 博

【頭 問】 吉田 貞介 岡部 昌樹

【指 導 委 員】 太田 雅夫 小笠原喜康 金子 勸榮 黒上 晴夫 黒田 卓  
堀田 龍也 水越 敏行 山西 潤一 吉崎 静夫 赤堀 侃司  
鈴木 克明 清水 康敬 堀口 秀嗣 中川 一史 稲垣 忠

## 平成27年度 石川県教育工学研究会 事業計画

| 事業                 | 期 日   | 概 要  |
|--------------------|---|--|
| 1 総 会<br><br>理 事 会 | 5月30日(土)<br><br>28年3月6日(日)  | 平成27年度総会（於：金沢星稜大学 C51教室）<br>・平成26年度事業報告・決算報告<br>・平成27年度事業計画・予算案<br>平成27年度理事会（於：金沢大学）<br>・平成27年度事業報告・決算中間報告<br>・平成28年度事業計画・予算案<br>・平成28年度役員案  |
| 2 研究事業             | 5月30日(土)<br><br>7月11日(土)<br><br>8月8日(土)<br><br>8月<br>9月5日(土)<br><br>10月9日(金)<br>10日(土)<br>11月7日(土)<br><br>28年2月6日(土)<br><br>3月6日(日) | ○第1回学習会「アクティブラーニングって？ホワイトボードの活用って？」<br>会場：金沢星稜大学 C51教室<br>講師：金沢星稜大学 佐藤 幸江 教授<br>○論文検討会<br>○第2回学習会「アクティブラーニングを支える学級づくり」<br>会場：金沢星稜大学 C41教室<br>講師：七尾市立小丸山小学校 八崎 和美 校長<br>○夏の研究会（デジタル表現研究会と共催）<br>「アクティブラーニングとメディア活用を学問する」<br>会場：金沢商工会議所<br>○論文検討会<br>○第3回学習会「アクティブラーニング最前線 授業実践編<br>～学校研究から見えてきたこと～」<br>○第41回全日本教育工学研究協議会全国大会 富山大会<br><br>○第4回学習会「アクティブラーニング最前線」<br>会場：金沢星稜大学<br>講師：東京学芸大学大学院准教授 岩瀬 直樹 先生<br>○第5回学習会「アクティブラーニング最前線 国際協働学習<br>～アートマイルプロジェクトから得られる学び～」<br>会場：金沢星稜大学<br>講師：金沢星稜大学 清水 和久 教授<br>○平成27年度石川県教育工学研究大会<br>○北陸3県教育工学研究会石川大会<br>会場：金沢大学 |
| 3 刊行事業             | 4月、6月、8月、<br>10月、12月、3月<br><br>7月、3月<br>3月  | ○研究会ニュース<br>年間を通じ当会 Web サイト <a href="http://i-kougaku.undo.jp/">http://i-kougaku.undo.jp/</a><br>にてニュースを掲載しています。<br>○会報（89号、90号、B5版、24頁、150部）<br>○第40号研究紀要（A4版、60頁、150部）   |

### 編 集 後 記

本号では、平成26年度石川県教育工学研究大会報告並びに今年度の研究テーマ「アクティブラーニングとメディア活用」に関する様々な報告を掲載できました。新しい言葉との出会いは、これまでの知見との対話を生み出します。今、この時代に大切にしたい教育について、理論と実践の両面からさらに学び合いたいものです。

お忙しい中、執筆頂いた先生方、本当にありがとうございました。 【会報担当】

### 会費納入についてお願い

研究会の円滑な運営のため、会費納入をお願いします。 年額 4,000円

振込先 北國銀行 高尾支店 普通 110292

#### 平成27年8月1日発行

|     |  |
|-----|--|
| 発行者 | 石川県教育工学研究会   |
| 代表者 | 村井 万寿夫   |
| 事務局 | 〒920-1192 金沢市角間町<br>金沢大学人間社会学域学校教育学類<br>附属教育実践支援センター |
|     | TEL 264-5588 FAX 264-5589                            |
| 印刷所 | ㈱小林太一印刷所   |
|     | TEL 238-5454 FAX 238-5453                            |